

「コンフェッションズ」

澤田 航太

あらずじ

高校三年生の名倉祐樹は、軽音楽部同期の春岡圭人と、圭人の幼馴染である菅沼渚とバンドを組んでいる。ある日、祐樹は圭人に人生初めての告白をしたことをきっかけに、圭人に避けられるようになる。祐樹は、「圭人が同性の自分に告白されたことを不快に感じたのではないか」と考え、友達としての『好き』と、恋愛対象としての『好き』を混同したことを後悔する。

ある日、圭人は自転車で転倒し、二年間の記憶を失う。圭人は、祐樹のことを全て忘れていた。圭人の記憶を取り戻したい渚は祐樹の協力を得て、圭人の関係者への聞き込みを始める。一方の祐樹は、圭人の心配をしながらも、どこかで「自分の告白を無かったことにして、圭人との関係を修復したい」とも思っていた。

圭人のクラスの委員長である長野美香や、圭人が通うギター教室に聞き込みを行ううち、祐樹と渚は、今まで知らなかった圭人の一面を知ることになる。「ミュージシャンになる」という夢を宣言したが故に、クラスで浮いていたこと。そんな中でも、圭人が音楽やバンドに救いを求めていること。そして、祐樹からの告白を受けたあたりから、元気を失っていったこと。

圭人の辛い過去を本人に伝えるかをめぐって、渚と口論になった祐樹は咄嗟に、「渚が圭人のために頑張るのは、圭人を恋愛対象として好きだからではないか」と問いかける。渚の傷ついた表情を見た祐樹は、再び友達としての『好き』と、恋愛対象としての『好き』を混同してしまった自分を恥じる。

その矢先、祐樹の祖母であり、良き相談相手であった光子が認知症を発症する。さらに圭人からも突然、「もう見舞いに来ないでほしい」と言われ、祐樹の孤独は深まっていく。

渚とのわだかまりを抱えたまま、祐樹は軽音楽部の引退ライブの日を迎える。客席で、圭人を馬鹿にした女子生徒と喧嘩をし

だした渚を、祐樹は諫めようとするが、最終的に加勢する。そこで祐樹と渚は、お互いの持つ「圭人を『友達として』好きな気持ち」を確認し、再び圭人と向き合うことを決意する。直後、渚が階段で後ろから美香に突飛ばされそうになるが、祐樹が寸手の所で止める。祐樹に追及された美香は、祐樹への好意を告白。祐樹と深い絆を持つ渚への嫉妬から、衝動的に犯行に及んだことを謝罪する。続けて美香は、圭人の事故にも遭遇していたことを明かし、「圭人が自分からハンドルを切って転んだように見えた」と証言する。

その日の夕方。圭人は、病院の待合室で認知症の治療に来た光子と出会う。「辛い経験も自分の人生をつくった一部である」と考え、自分の経験してきたすべてを書き残そうとする光子の話聞き、圭人はなぜか涙を流す。その様子を見た祐樹は、渚とともに圭人の病室に乗り込む。圭人に事故の真相を思い出させるため、事故付近に起きたことを包み隠さず語ろうとする祐樹。

しかし、圭人は祐樹の話を通り、「記憶を失っていた振りをしていた」と告白する。由美と進路のことで口論になり、渚から「バンドを辞めたい」と告げられた圭人は、「大事な人全員からミュージシャンになる夢を否定されている」と感じていた。挙句祐樹に告白され、「祐樹が自分とバンドを続けるより、恋人でいることを優先した」と感じて自暴自棄になった圭人は、自ら自転車転倒した。記憶を失った振りをすることで、別人として生き、再度ミュージシャンを目指そうとしていた。圭人は、同性の祐樹からの告白への不快感など、全く抱いていなかった。

圭人の告白をきっかけに、「バンドとして一緒に夢を追いかけてい」圭人と、「バンドとしてでなく、友達として一緒にいたい」渚が口論を始める。それを聞いた祐樹は、「好き」の種類にこだわること辞め、圭人と渚に「人生二度目の告白」をする。

人物関係図

- 名倉 祐樹 (14) (16) (18) .. 高校三年生。軽音楽部
- 春岡 圭人 (16) (18) .. 祐樹のバンド仲間
- 菅沼 渚 (16) (18) .. 祐樹のバンド仲間。圭人の幼馴染
- 長野 美香 (18) .. 圭人のクラスメイト。委員長を務める
- 春岡 由美 (42) .. 圭人の母
- 名倉 光子 (78) .. 祐樹の祖母
- 高野 紗枝 (14) (18) .. 祐樹の中学吹奏楽部時代の同期で、
圭人の現クラスメイト
- 原田 紘一 (18) .. 圭人のクラスメイト
- 堀内 奈々 (18) .. 圭人のクラスメイト
- 丹生 純 (18) .. 軽音楽部 部長
- 大庭 夏葉 (15) .. 祐樹の中学吹奏楽部時代の先輩
- 宝田 洋二 (18) .. 2年前の、軽音楽部 部長
- 富岡 茂 (50) .. ギター教室講師

10 生田高校・視聴覚室(夕方)

ドラムセットに座る名倉祐樹(18)、ギターを持った春岡圭人(18)とベースを持った菅沼渚(18)が話すのを見ている。

圭人「告白って、したことある?」

祐樹「…ない」

渚「したことは、ない」

圭人「うざい言い方…」

渚「すんの?」

圭人「いや、しないけど…1組で、告白ブーム起きてて」

渚「うざいブーム…」

圭人『『バトコク』とかさ、流行ってんじゃない」

祐樹「何、『バトコク』って」

圭人『『バトって告っていいですか?』』

祐樹「……」

渚「つていう、恋愛リアリテイショーね」

祐樹「へー…」

圭人「男チームと女チームに分かれて、バトルに勝った人だけが、

好きな異性に告白できるっていうルール」

祐樹「むずいルール…」

圭人「むずいか?」

渚、ちらっと祐樹を見る。

渚「でも告白って、そんなポンポンやるもんかな?」

圭人「渚、意外に慎重派か…」

渚「だって、振られるのつてめっちゃリスクあるじゃん。相当、

勝算ないと無理」

圭人「いやー…でも、だから感動するっていう説もあるんだよな」

圭人、少し考えて、

圭人「告白の歌：作ってみるか。流行ってるし」
渚「やめてよ、歌うの私なんだから」

祐樹、苦笑しながらドラムを叩き始める。

20 同・校舎裏（夕方）

吹奏楽部の練習する音が遠巻きに聞こえる。圭人、
目が泳いでいる。

圭人「え…どういうこと？」

圭人と向かい合い、気まずそうに立っている祐樹。

祐樹「リスク、取ってみた」

圭人「いや…してほしいって意味じゃなかったんだけど」

祐樹「…ごめん。やっぱ…今のなしで」

圭人「なんだよ…。名倉、そっちか…」

祐樹「その言い方は…ちよっときついな（苦笑して）」

大きく息を吐き、早足で立ち去る圭人。

祐樹N「人生初の告白には、少しも感動がなかった」

30 名倉家・リビング（夜）

食卓の夕飯の大半を残して、箸を置いて席を立つ

祐樹。祐樹の祖母・名倉光子（78）、祐樹の後ろ

を通りがかる。

光子「あれ、不味いですか？」

祐樹「あ、いや…ごめん…」

光子「卵続きすぎ？ 買いすぎちゃったのよね」

祐樹「ちよっと…体調悪いだけだから」

光子「失恋？」

祐樹「大人ってさ…。元気ない人見ると、一言目には『失恋？』」

って聞くよね…」

光子「…で？ 失恋？」

祐樹「二言目も聞いてくるタイプだ…」

光子、祐樹を見つめている。

祐樹M「だめだ、誤魔化せないやつだ」

祐樹「何。年取ったらそういうの分かるの？」

光子『体調悪い』歴、長いからね。体調不良って、奥が深いの」

祐樹「知りたくないな…体調不良の奥」

祐樹、再び椅子に座って、

祐樹「失恋よりひどいよ。好きな人と友達、同時にいなくなった」

光子「そうか。それは弱ったね…」

祐樹「ほんと。ミスった…」

光子「ミスった…。ミスって？」

祐樹「え、なんだろう」

祐樹、少し考えて

祐樹「友達としての好きと、…恋愛としての好き？ を間違えた」

光子「高校生に分かったら怖いよ。私だってそんな分かってない

のにさ」

祐樹「そうかな…」

光子「好きって死ぬほどややこしくて、面白いからね？」

祐樹「…へー…」

光子「だから、ミスじゃないね。そんなの」

祐樹、息を吐き、再び食べ始める。

祐樹M「とはいえ、ミスはミスだ」

4〇 生田高校・廊下（日替わり）

祐樹が歩いていると、正面から圭人が歩いてくる。

祐樹と目が合った圭人、踵を返して歩き去る。

祐樹N「春岡はその後のバンド練習を全て、キャンセルした」

50 同・視聴覚室(夕方)

軽音楽部の集まり。生徒たちががやがやと話している。菅沼渚(18)、バンドスコアを読みながら、

渚「おお。遂に言ったんだ」

祐樹「なんか、焦ったんだと思う」

渚「確かに。圭人、誰かに適当に告つたりしそうだったもんね」

祐樹「でしょ? 『告白の歌詞書くための取材だ』とか言ってるさ」

渚「それで、リスク取ったんだ。やるじゃん」

祐樹「ただ思ったより、代償でかかった…完全無視」

渚「あいつ、ガキだね…。告白されたの初めてだから、動揺し

たのかな?」

祐樹「そっか、初めてか」

渚「うん…多分ね?」

祐樹「それが男って…なんか、申し訳ないな」

渚「え。なんで?」

祐樹「いや、だって特殊というか…多分春岡、女子好きだし」

渚「まさか…振られた理由、それにするつもり?」

祐樹「だって…『そっちか』って言われたし…」

渚「だとしても。後から決めつけるのは、ずるくない?」

祐樹「まあ、それぐらい…言い訳させてよ」

部長・丹生純(18)が教室前方で話し始める。

丹生「はい、事務連絡。今週の土曜は、引退ライブのオーディシ

ョンです。朝9時、視聴覚室集合でお願いしまーす」

祐樹「ライブ、出れるかなー…」

渚「プロミュージシャン志望だよ。テストの中日にバンド練入れ

てくる奴だよ? しかも…一応、最後だし」

祐樹「そっか。最後か…」

6〇 同・視聴覚室（日替わり）

T「土曜日」

演奏するバンドを教室後方で見ている祐樹と渚。

祐樹「…ごめん…」

渚「なんで、名倉が謝んの…」

渚、力なく祐樹の二の腕を殴る。

7〇 歩道

倒れた自転車のそばに、倒れている圭人。

8〇 生田病院・病室（夕方）

ベッドに寝ている圭人。頭に包帯を巻いている。

春岡由美（42）、圭人の手を握っている。

祐樹と渚、入ってくる。

渚「圭人！」

由美「渚ちゃん…」

渚、由美に会釈して、真っ先に圭人に近づく。祐

樹は、少し気まずそうにゆっくりと歩み寄る。

渚「心配した…。オーディションは、別日で受けていいって」

圭人、不思議そうに渚を見つめる。

圭人「渚…だよね」

渚「だよ？ どうした？」

圭人、祐樹の方を見て

圭人「この人は…誰？」

祐樹、愕然とする。

タイトル「コンフェッションズ」

90 生田病院・カフェ(夕方)

由美と祐樹と渚、机を囲んで話している。

由美「ここ2年ぐらいの記憶が、すっぱり抜けちゃったみたいで。

　　転んだ拍子に、スマホも壊れちゃって」

祐樹「そうなんですネ…じゃあ僕のこととか、完全に」

由美「(頷いて)ごめんね」

祐樹「いや、もう…誰も、悪くないので」

由美「記憶が戻る可能性はあるけど、何年かかるかは…」

渚「私たち、何かお手伝いできますか」

由美「ありがとうございます…じゃあ色々、教えてあげて」

渚「教える…」

由美「圭人がどんな人だったか、とか。最近何してたか、とか。

　　…少しでも元の状態で、卒業できるように」

渚「…分かりました。任せてください」

　　渚を見つめる祐樹。

100 同・玄関口前(夕方)

　　病院玄関口から出てくる祐樹と渚。

渚「さて。どっから行こうかねー」

祐樹「…何が？」

渚「いや…圭人の情報収集？」

祐樹「ああ…」

渚「部活のことは、私らでいけるでしょ。だからクラスと…あと、

　　通ってたギター教室あたりかな」

祐樹「うん。…あのさ」

渚「どうした？」

祐樹「いや、全然協力するんだけど」

渚「だけど、何…？」

祐樹「その、告白のこととかは、言わなくても…いいよね」

渚「え、なんで」

祐樹「なかったことにすれば、仲直りできるかもだし」

渚「それは…仲直りじゃない？」

祐樹「…え？」

渚『仲直りしよ』って言われて、『あ、私ら喧嘩してたんだ』っ

て気づくこととか、ない？」

祐樹「ああ…あるっちゃあるか」

渚「仲直りって、喧嘩したことを受け入れることだから。なかつ

たことにするんじゃない？」

祐樹「…ごもつとも…」

110 生田病院・病室（夜）

ベッドに横たわった主人、「記憶障害と闘った3年」
という本を読んでいる。

120 菅沼家・渚の部屋（夜）

ベースを弾いている渚。同じフレーズに躓いて何度も
弾くがうまく弾けず、深くため息をつく。

130 名倉家・祐樹の部屋（夜）

ベッドに寝転がり、スマホで自分たちのバンド演
奏動画を見ている祐樹。

祐樹N「僕たちは正直、そんなに良いバンドではない」

ウインドウを切り替え、『バトって告っていいです
か？』の動画を見始める祐樹。

140 時沼中学・校舎裏（回想・4年前）

T「4年前」

軽音楽部の練習する音が遠巻きに聞こえる。祐樹

（14）、目が泳いでいる。

祐樹「え…どうということ…ですか？」

祐樹と向かい合い、気まずそうに立っている大庭

夏葉（15）。

夏葉「だから…付き合えたら、嬉しいなって」

祐樹「…あ、嬉しいです。ありがとうございます」

夏葉「ほんと！ じゃあ…」

祐樹「でも、付き合えません。ごめんなさい」

夏葉「え…」

祐樹N「中学の時、僕に告白してくれた夏葉先輩は、吹奏楽部

一の人気者だったので」

150 同・音楽室（4年前）

吹奏楽部の練習中。後方でドラムセットに座って

いる祐樹。教室にいる大半が女子である。

祐樹N「吹奏楽部に、僕の居場所はなくなった」

うなだれる夏葉、周囲の女子生徒たちに慰められ

ている。その中の一人、高野紗枝（14）、夏葉に

語り掛ける。

紗枝「先輩、大丈夫ですか…？」

夏葉「ごめん…。ちよつと、ショックだなー」

紗枝「名倉、他の2年の告白も全部断ったらしくて。夏葉さん振

るとか、女子に興味ないんですよ。多分」

紗枝、ちらっと祐樹を見て

紗枝「ほら、『そっち系』…ってというのはだめか。LGBTQ¹みたい

な？」

祐樹、紗枝の視線に気づいて下を向く。

160 生田高校・視聴覚室（2年前）

T「2年後」

「ようこそ1年生！」と書かれた黒板の前で話している宝田洋二（18）。席に座り、話を聞いている祐樹（16）。

祐樹N「高校では、ドラムを続けられて、もうちょっと女子が少なそうなの、軽音楽部に入部した」

祐樹、肩を叩かれて振り向くと、圭人（16）。

祐樹「…何」

圭人「どう思った？ さっきの演奏」

祐樹「さっき…。ああ、部長たちのバンド…」

圭人「なんか、つまなくなかった？」

祐樹「そうかな？ うまかったけど」

圭人「技術があるのは分かるけどさ…それだけじゃないじゃん。

音楽って」

祐樹「（咳払いして）あの…名倉です」

圭人「ああ、春岡圭人。ギタリスト。プロ志望」

祐樹「あ…よろしく…」

圭人「なんか、気合いそう。この後さ、スタジオ行こうぜ」

引きつった笑顔を浮かべる祐樹。

祐樹N「前の席に座っただけで、『気が合いそう』認定を受けた僕は、春岡とスタジオに行くことになった。春岡は距離の詰め方が変で…まあ、タイプの顔だった」

170 音楽スタジオ（2年前・夕方）

一通りギターを弾き終えた圭人。頷いている祐樹。

圭人「どう？」

祐樹「うん…。良いんじゃない？」

圭人「具体的な感想が、欲しいかな。厳しくていいよ」

祐樹「リズムは…結構よれてる」

圭人「あー、そこねー…」

祐樹「ミスタッチも多いし、音も全然抜けてない。そもそもちよ

っと、チューニングずれてない？」

圭人「…なるほど？」

祐樹「なんで、あんなに自信あったの？ …って思った」

圭人、大きく息を吐く。

祐樹「(ハッとして)ごめん、なんか…」

圭人「いいね」

祐樹「あ、なら良かった…」

圭人「バンド組もう。一緒にプロになろう」

祐樹「…なんで」

祐樹N「急だったが、バンドという分かりやすい居場所が早く欲しくて、引き受けた。あと、顔がタイプだった」

180 楽器店・楽譜コーナー(2年前・夕方)

楽譜を立ち読みしている祐樹と圭人。圭人、バン

ドスコアを閉じて

圭人「やっぱ、プロになるならコピーしてる場合じゃないな。曲

作らないと」

祐樹「あのさ。なんでそんなに、プロになりたいの？」

圭人「理由って、そんな大事？」

祐樹「一緒にやる側としては、知っておきたいかな」

圭人「まあ、それもそうか…」

圭人、少し考えて、

圭人「救える人間になりたいから、かな」

祐樹「救える人間…」

圭人「中三の頃さ。そのまあ…色々あつて。夜、リビングで母親が泣いてるの見ちゃつて」

祐樹「…大変…」

圭人「そしたら、全然知らないバンドの歌、スマホで流し始めて。さつきより、もっと泣いて。でも、ちよつと違う、救われてんなー、つて感じの泣き方で」

祐樹「良い曲だったんだ」

圭人「本当は、俺が救えたらいいんだけど。どうやったら良いかわかんなかった。でもその時、『あ、音楽なんだ』つて圭人を見つめる祐樹。

祐樹N「別に音楽以外でも救えるんじゃないかと、思った。でも、春岡があまりに良い顔をしていたので、黙っていた」

190 生田高校・視聴覚室（2年前・夕方）

ベースを弾いている渚（16）。

祐樹N「そして、春岡の幼馴染で、カラオケが得意だという菅沼が、ベースボーカルとして加入した」

顔をしかめながら弾いている渚。

渚「ねえ、誰かベースいないの？ 私、歌だけが良いんだけど」

祐樹N「思えば。菅沼が楽しそうに弾いているところは、2年経った今でも、見たことがない」

圭人「いや。俺の曲は女性ベースボーカルがはまるんだよ。ボーカルだけだと、歌に気合入りすぎるんだよ」

早弾きしようとして失敗する圭人。

圭人「あーくそっ」

祐樹 N 「春岡は、プロ志望の割に上達が遅かった」

200 ファミレス・テーブル席（2年前・夕方）

タブレットでランキング形式のメニューを見ている主人。

主人 「1位スタミナ焼肉定食、2位チキンステーキプレートで：

3位ほうれん草ベーコンっておかしくね？ ハンバーグ

だろ、普通」

主人の正面には祐樹と渚が座っている。

主人 「名倉、何にする？」

祐樹 「ほうれん草ベーコン」

主人 「お前か！ ほうれん草ベーコンを押し上げてるのは」

祐樹 「実際：タンパク質取れば、十分だから」

主人 「いやいやお前さ。ドラマーなら、絶対肉食つとした方がいい

いって。体力勝負だろ」

渚 「私、スタミナ焼肉定食と、メンチカツ単品にするわ」

主人 「そうそうこれこれ！ 渚を見習えって」

渚 「あ：（財布の中身を見て）やば」

主人 「嘘だろ…。また金ないの？」

渚 「今月、バイト入れておらず：（と、頭を下げる）」

主人 「もう、合計1万ぐらい貸してるんだけど」

渚 「絶対返す。来月、大きな収入があるから…」

祐樹 「お年玉じゃん、絶対」

主人 「一生覚えとくからな？ 取り立てるからな？」

タブレットを操作する主人。

主人 「よっしゃ、注文完了。ドリンクバー」

主人、席を立つ。

渚 「名倉ってさ、主人に冷たいよねー」

祐樹「…そう？」

渚「で、どうでもいい人には、ほどほどに優しい」

祐樹「別に…」

渚「圭人には、冷たい」

祐樹、驚いて渚を見つめる。

祐樹M「だめだ、誤魔化せないやつだ」

祐樹「…すごいな」

渚「すごいだろ」

祐樹「うん…」

渚「どこが良いの？」

祐樹「んー…例えば…『男なら肉食え』じゃなくて、『ドラマー

なら肉食え』って言う所とか」

渚「あー…良い所だね。バンド馬鹿は無害だね」

祐樹「あとは、シンプルに顔がタイプ」

渚「うん、分かんないわ」

祐樹「これ…黙っといてね」

渚「え、秘めておく感じ？」

祐樹の視線の先。ドリンクバーの前で悩んでいる

圭人。

祐樹「好きなものランキング、1位・バンド、2位・女、3位・

男って気がする。何となくだけど」

渚「いや、2位以下順不同でしょ。『ドラマーなら肉食え』だよ」

祐樹、渚の横顔を見つめる。

渚「つてか、2位が女だとしても、ごぼう抜きしな。初登場1位

に躍り出る覚悟でやりなよ。多少、協力するから」

祐樹「…ここ、奢らせてください」

渚「あざっす」

祐樹と渚、握手する。

祐樹N 「このバンドは、悪く言えば僕の下心に繋がっている」

210 生田高校・視聴覚室（2年前・日替わり・夕方）

譜面台のノートに書いた内容を、消しゴムで消している主人。その様子を眺めている祐樹と渚。

渚 「…スマホ、使わないの」

主人 「この書いたり消したり感がカッコいいんだって。こう…

『汗水たらして作曲してる』って感じで」

渚 「ほんと、形から入るな…」

主人 「まあ、その形から入る俺に選ばれた君たちは、自信を持っ

ていい、ってことで」

渚 「偉そー…」

祐樹 「いいから練習しろって（と笑って）」

主人 「待って。今凄いいフレーズが降りてきてる…」

穏やかな笑顔を浮かべる祐樹。

祐樹N 「よく言えば、安らげる居場所だった」

（回想終了）

220 名倉家・祐樹の部屋（戻って現在・夜）

寝転がり、虚ろな表情でスマホを見ている祐樹。

画面上では、『バトコク』の動画が再生されている。

動画の中で、男性が泣いている。字幕で「告白に

失敗したユキヤは、ここで脱落」と表示される。

祐樹N 「結局自分の下心に、安らげる居場所を奪われたのだ」

祐樹、スマホを放り出して天井を見る。

祐樹 「馬鹿だなあ」

230 ギター教室・スタジオ（日替わり）

ギター教室講師・富岡茂（50）、ギターを膝にのせて座っている。渚と祐樹が正面に座る。

富岡「そう…今週末ないなと思ったら、そんなことに…」

渚「はい。それで、ここに通ってた時の圭人の様子とか、先生から教えてもらったこととか、伝えたくて」

富岡「もちろん。なんでも聞いて？」

富岡、手癖なのかギターをおもむろに弾き始める。

渚「圭人って、いつからここに」

富岡「いつだっけな…2年ぐらい前かな。プロになりたい、って言うって。月謝のためにバイトしてるって」

興が乗ってきて、ギターの音が大きくなる。

渚「（声を少し大きくして）どんな生徒でしたか？ 圭人は」

富岡「熱心だったねー！ ちょっとずつだけど、上手くなってたし。そうそう、このフレーズ好きだったな」

富岡、早弾きのフレーズを弾いて見せる。

渚「はは…どう伝えようかな…」

富岡「あと3回に1回ぐらいさ、『俺、人を救う音楽作りたいんですけど、結局音楽に救われてます』って言うのよー」

祐樹「…言いそう」

富岡『くそみたいな毎日だけど、バンドやってる時は全部忘れられる』ってさ。俺の学生の頃みたいで、可愛くて」

祐樹「くそみたい…」

富岡「あ、でも…」

暗い曲調でギターを爪弾き始める富岡。

富岡「先週は元気なかったな…。なんか、変だった」

祐樹「先週…ですか」

富岡『バンド、もうできないかも』って」

祐樹、渚の方を見る。渚、視線に気づきつつも気

を取り直して

渚「あの、練習してた曲のリストとか、もらえますか？」

祐樹、憂鬱な表情で俯く。

祐樹N「僕の下心は、圭人の居場所も奪っていたのかも」

240 生田病院・病室（夕方）

ベッド脇に座る祐樹と渚。横たわる圭人。

圭人「あの…大事なこと、確認したいんだけど」

渚「うん」

圭人「記憶失くした人って、金銭トラブルに巻き込まれやすいらしくてさ。…俺、お金借りたりとか、してないよね？」

渚「え、私ら高校生だよ？ お金の貸し借りとか、ないよ（笑）」

祐樹、驚いて渚を見る。

圭人「そっか…だよね」

渚「バイトもしてたし。そうだ、圭人ね、プロミュージシャン目

指してたんだ。自腹でギター教室にも通ってた」

圭人「…へー…」

渚「これ、練習してた曲のリストで…（と、スマホを探す）」

圭人「二人は？ プロは目指してなかったの？」

渚「…うん、特に…」

圭人「そっか…。『方向性の違い』ってやつだ…」

渚「（取り繕って）あ、あとね。告白の曲、作ろうとしてて」

圭人「告白…」

祐樹「（焦って）えっと、でも。告白経験ないから、苦労してた

みたいで…」

圭人「あ、ないんだね。俺…」

祐樹「ああ、まあ予想？ 予想ってのも失礼か。ごめん、はは…」

互いに苦笑いを浮かべる圭人と祐樹。

250 生田高校・3年1組教室（日替わり）

（以下、祐樹と渚が現れるまで恋愛リアリティシ
ョーをデフォルメした雰囲気で行進）

賑わう教室。4人の女子グループ、じゃんけんを
している。堀内奈々（18）、勝つ。

奈々「よし。やっこだ…！」

女子グループの一人に紗枝（18）がいる。紗枝、
立ち上がってスマホのカメラを向けながら

紗枝「行っておいで！ 絶対大丈夫ー」

拍手する女子グループ。

奈々、男子グループで話している原田紘一（18）
の方へ向かう。

奈々「原田君…ちよつといい？」

原田、少し驚いた後、覚悟を決めて、

原田「うん…いいよ」

教室前方から出ていく原田と奈々を、後方の扉付
近から遠巻きに見ている祐樹と渚。

渚「あれが…バトコクゲーム…」

祐樹「…高野さん…」

渚「あ、知り合い？」

祐樹「あ、そう。中学の吹奏楽部で…」

祐樹と渚のもとに、長野美香（18）が来る。

美香「お待たせしました。委員長の長野です」

260 同・3年1組教室前の廊下

窓際に立っている祐樹・渚・美香。

美香「記憶喪失って…。自転車で転んだだけですよね」

渚「打ちどころが、悪かったみたいで」

祐樹「…お見舞いとかって、行きました？」

美香「行きたいねーって言う話が出たんですけど。みんな受験とかが、大変みたいで」

渚「受験…まあ、私らもだけど」

美香「それで？ クラスでの…春岡君ですよね」

渚「はい。なんかあんまり、クラスの話、聞いたことなくて」

美香「ああ…まあ、でしょうね」

祐樹「…っていろいろのは？」

美香「多分、楽しくはなかったはずだから」

渚「楽しくない…っていろいろのは」

美香「ちよつと、浮いちゃってて」

渚「なるほど…」

美香「軽音楽部の、原田君っているじゃないですか。彼が『下手なのにミュージシャン志望の、痛い人だ』って、春岡君のこと」

渚「(舌打ちして) 原田…」

美香「(焦って) でも私は、春岡君自身は良い子だと思ってます」

渚「良い子…ではないかなあ」

気まずい沈黙。

祐樹「えつと…色々、教えてくれてありがとうございました！」

頭を下げ、先導して立ち去ろうとする祐樹。納得のいかない様子で祐樹についていく渚。

美香「あ、あの」

立ち止まり、振り返る渚と祐樹。

美香「ちなみに、二人は…お付き合いか」

渚、深くため息をつく。

渚「本当に流行ってるんですね。恋愛」

美香「…あ…ごめんなさい」

渚「そんなに他人に興味があるなら、もっと圭人…春岡君のこと、見ててほしかったです」

会釈して立ち去る渚。後を追う祐樹。取り残された美香、唇を噛みしめる。

270 同・階段へ踊り場

早足で階段を降りる渚の後を追う祐樹。

祐樹「今のとかは、さすがに言わないよね…?」

渚「何も知らせずに復活させる気? 『記憶ありません! 今日からみんな仲良くしてね!』みたいな?」

祐樹「うん…」

渚「そっちの方が残酷でしょ」

祐樹「でも、リセットできるかもしれないじゃん」

渚「リセットなんて、自分ひとりじゃできないよ。相手が忘れてないなら意味ない」

祐樹、踊り場で立ち止まって、

祐樹「辛いことなんて、忘れた方が良いつて」
渚も立ち止まる。

渚「圭人は、辛いのを消すんじゃないかって、塗り替えられる人だよ」
祐樹、少し逡巡して、

祐樹「一応、聞けけどさ。…圭人のこと、好きだったりするの?」
渚「それは、どっちの意味で?」

祐樹「僕と、一緒の意味で」
渚「多分…今名倉が思ってるのとは、違う」

祐樹「でも、おかしいじゃん。こんなに春岡のために頑張れるっ
てさ。ただの友達にここまでできるの、ちよっと…」

渚「男と男の愛情があり得ないって言われたら、どう思う?」

祐樹「ん…？ いや、それはちょっと嫌…」

渚「一緒だよ。男と女の友情があり得ないって言われるの、それぐらい嫌」

歩き去る渚。祐樹、何も言えず取り残される。

280 名倉家・台所（夜）

皿を洗っている光子。隣に来て皿を拭く祐樹。

光子「珍しい。手伝ってくれるの？」

祐樹「ちよつと、話聞いてほしくて」

光子「相談料ってことね」

祐樹「うん…また、友達なくしそうで」

光子「あらあら」

祐樹「自分がされて嫌な事ってさ…なんで人にしちゃうんだろ

う。冷静に考えれば、分かったのに」

光子「友達なんて、そんなことの繰り返しじゃない？」

祐樹「でも…今日、めちゃくちゃ傷つけたと、思う」

光子「傷つけたことのない人は、傷つけない方法も分かんないから。それに、傷は大体治るから。若いうちはね」

祐樹、ホツとしたように笑う。

光子、蛇口の水を止めて

光子「だからね、孝之」

祐樹「ん？」

光子「…え？」

祐樹「あ、えーつと、僕、祐樹だよ」

光子「あなた…孝之じゃないの？」

祐樹「孝之は、父さん」

光子「じゃあ、孝之はどこ？」

祐樹「今…北海道」

光子「あら、そう…」

光子、少し考えて祐樹を見て

光子「じゃあ、あなたは…どなた？」

目を見開いている祐樹。

290 生田病院・待合室

光子と隣り合って座っている祐樹。

光子「長い『体調悪い』歴の中でも、認知症は初めて」

祐樹「まだ、軽度らしいから」

光子「孝之と祐樹は、似てるからねえ。目元が」

祐樹「僕、そんなに老けてる？ ショックなんだけど」

光子と祐樹、小さく笑った後

光子「情けないわあ…ごめんねえ」

祐樹「誰も、悪くないでしょ…謝らないだよ」

光子「迷惑かけないように、するからね」

祐樹、少し泣きそうになって

祐樹「別にいいって。迷惑とか…。元気で生きてくことだけ、考

えてよ」

光子「ありがとうね。…ごめんね」

祐樹「…ちよつと、トイレ」

席を立ち、去る祐樹。

300 同・男性トイレ前

祐樹が出てきたタイミングで、由美も女性トイレから出てくる。

由美「あら」

祐樹「あ…どうも」

由美「毎日、ありがとう」

祐樹「あ、今日は祖母の付き添いで。…認知症らしくて」

由美「認知症…。それは大変…」

祐樹「まだ、軽度で。たまに記憶が怪しくなるぐらいですし。親も、こっちに来てくれる予定なので…大丈夫です」

由美「記憶療法とか、良さそうなのが あつたら、教えるからね」

祐樹「ありがとうございます」

由美「なるべく思い出とか、覚えてほしいもんね」

祐樹「…でも、言うほど良い思い出ないんですよね。小言多かったです、頻繁に口喧嘩してまし。…良い思い出だけ、覚えててくれないかなあ」

由美「…」

祐樹「いや、すみません。良くないですよ、こういうの」

由美「ちよつと、分かる」

祐樹「…え」

由美「圭人が事故に遭う前の日ね、喧嘩したの」

祐樹「…喧嘩」

由美「知ってるかもしれないけど…圭人ね、進路調査票に『ミュージシャン』って書いてて」

祐樹「はい…知ってます」

由美「冗談というか、大学には行くと思ってたからね。受験も近くなって、志望校を聞いたの。そしたら、『大学はただの回り道だから行かない』って」

祐樹「それで、喧嘩に」

由美「（頷いて）圭人の父親もね、ミュージシャンで」

祐樹「…初めて聞きました」

由美「圭人にも言っていないの」

祐樹「そうなんです…」

由美「全然売れなくて、精神的にも追い込まれていって…。結局、

『圭人を育てる自信がない』って言い残して、他所の女の人の所に」

祐樹「…ひどい…」

由美「だから私も、『ミュージシャンはやめて』って、つい言うちゃって。そしたら圭人、すごく悲しそうな顔して」

祐樹、由美を見つめる。

由美「(ハッとして)ごめんなさい、こんなこと名倉君に…」

祐樹「いえ、全然…」

由美「このこと、圭人には内緒ね。圭人もきつと…思い出したくないだろうから」

祐樹「…はい。言わないです」

310 同・病室

圭人、本を読んでいる。祐樹が入ってくる。

圭人「…今日は、一人？」

後から光子もついてくる。

祐樹「ばあちゃんも、一緒」

光子「こんにちは。ばあちゃんです」

圭人「こんにちは…。あ、春岡圭人です。(祐樹へ)なんかの付き添い？」

祐樹「うん。…ちよつとね」

光子「ボケちゃったのよ。認知症！」

一瞬の沈黙。

圭人「あ…じゃあ、一緒ですね。俺も記憶、ちよつとなくて」

光子「あら、そうなの？ 若いのに大変ね」

圭人「いえいえ…大変なのは、一緒です。…頑張りましょうね」

圭人、祐樹の視線に気づいて

圭人「…何」

祐樹「なんか、大人の対応だ。別人みたい」

圭人「なんか、失礼じゃない？（と笑って）」

祐樹「いやいや、いいこといいこと」

圭人「名倉、君…」

祐樹「名倉、って呼んでたよ」

圭人「ああ。…俺、多分さ。記憶なくなる前と別の人になってる

じゃん。接し方とか。それって、どう思う？」

祐樹「どうって…でも、春岡は春岡だし。思い出とかはおいおい、

また教えればいいし」

圭人「そっか…」

光子「（祐樹へ）圭人君が、好きなのねー」

祐樹「うん…。あ、友達としてね」

祐樹、圭人と目が合わせられない。

祐樹「（圭人へ）そういえば…なんか思い出した？」

圭人「うーん…全然だね」

祐樹「そっか」

圭人「なんか、ホッとした顔してる？」

祐樹「してないよー…」

圭人「俺から、金とか借りてた？」

祐樹「借りてないって（と笑って）」

祐樹、圭人を見て

祐樹「今の感じ、すごく春岡だった」

圭人「そう？ 良かった」

祐樹「…また来るね」

祐樹、立ち去ろうとする。

圭人「…あのさ。もう、無理して来なくていいよ」

祐樹「…え」

圭人「自分を忘れてるやつと話すの、疲れるでしょ。今は、気遣

つてくれてるけど」

祐樹「そんなことは…」

圭人「ってか、ごめん。俺は俺で、ちょっと疲れるんだ。気遣う」

祐樹「あー…そっか、ごめん！ 確かに、そうだよね」

圭人「いや…うん…」

祐樹「じゃあ…いつか、疲れなくなったら…」

祐樹、足早に病室を出ていく。

320 同・廊下

渚、歩く祐樹と光子とすれ違う。渚は祐樹に気づき、すれ違いざまに振り向く。

330 同・病室

渚、病室に入ってくる。ベッドで本を読んでいる圭人。

渚「なんかあった？ 名倉と」

圭人「え…」

渚「さつき、すれ違って。名倉、泣いてた…気がするんだけど」

圭人「ああ…うん。もう来なくていいって、言った」

渚「…なんで」

圭人「だって、申し訳ないじゃん。俺、全部忘れてるんだもん。

名倉君のこと」

渚「でも…さ。それでも来るのって、圭人のこと好きだからでしょ？」

圭人「好き…。うん。ありがたい」

渚「あのね。圭人と私と名倉って、意外と仲良かったの。なんかぱっと見、分からないんだけど。…うまく言えないな」

圭人「バンド、組んでるぐらいだしね」

渚「うん…。でも、それで言うよね。私は…。卒業したら、辞めようとしてた。バンド」

圭人「…そう…」

渚「自分で言うのも恥ずかしいんだけど、私全然うまくならなくて。前、圭人に言っつて、止められたんだけど」

圭人「多分…悲しかったのかな、俺」

渚「結局、第一志望さ。県外の大学にしたんだ。だから…多分、

バンド続けるの無理になる。物理的に？」

寂し気に笑う圭人。

渚「…圭人？」

圭人「そういうことか」

渚「何が？」

圭人「良い機会だよな、記憶喪失って。リセットするうえで」

渚「え…そんなつもりないよ。バンドじゃなくなった後も、友達として…」

圭人「友達だったっけ？ …覚えてない」

渚「え…」

圭人「もう、別の人だから。放っておいて」

渚「ねえ、どうということ？」

圭人が起き上がった勢いで、「記憶障害と闘った3年」がベッドから落ちる。病室を出ていく圭人。

渚、圭人の勢いに追いかけるのを諦める。

本を拾い、ふとめくり始める渚。付箋がついている箇所をめぐっていく。「ぼやけた世界」「友達を忘れて」といった目次の箇所には線が引かれ、付箋が貼られている。後半の「記憶療法」「周りの人の支え」といった目次の箇所はまっさらで、付箋も貼られていない。

渚「……」

340 生田高校・視聴覚室（日替わり）

軽音楽部の引退ライブが行われている。ステージ脇の壁際、照明機材の近くでライブを見ている祐樹、同じ壁際に佇む美香と目が合い、会釈する。

その先に、後方で見えている渚を目撃するが、目を逸らす。渚の目の前では、奈々と紗枝が二人並んでライブを見ている。奈々と紗枝の視線の先、原田がギターを演奏している。曲が終了し、会場が拍手と歓声に包まれる。

原田「ありがとうございます。えっと、今日来られなかったミュ

ージシャン兄貴こと、春岡君に次の曲を捧げます」

客席の奈々と紗枝などが、爆笑する。

紗枝「やめなよー。かわいそうだって（と笑って）」

ステージ上の照明を調整している祐樹、唇をかみしめる。

原田「痛い痛い！！」

原田の声に驚いて祐樹がステージを見ると、渚が原田に掴みかかっている。

紗枝「何すんの！！」

祐樹「菅沼！」

祐樹、渚に駆け寄る。

紗枝「あれ、名倉君」

祐樹、紗枝をちらっと見るが無視する。奈々から渚を引きはがす。

祐樹「だめだめ！ 殴るのはだめ！」

渚「一発だけ。お願い。手首に一発だけ」

原田「悔しいんだよな？ 春岡のせいで出れなくて」
渚「…あ？」

原田「でもいいじゃん。ぶっちゃけうまくないし。出ても黒歴史
重ねるだけじゃん」

祐樹「バトコクの真似のほうが、黒歴史だろ」

何かを言おうとした渚、祐樹を見る。

祐樹「告白なんか、好きって思ったときに勝手にやれよ。調子乗
って内輪で盛り上がって、本気で夢見てるやつ馬鹿にし
て。お前らみたいなのが、一番恥ずかしい」

紗枝「毒舌オネエじゃん（と嘲笑って）」

祐樹の表情がこわばる。

紗枝「まあ…生きづらい人同士？ 仲良くしてればいいじゃん？」

祐樹「（鼻で笑う）」

紗枝「…何」

祐樹「高野さん。中学の時、僕に告白してくれて、ありがとう」

紗枝「（動揺して）は、何が？」

奈々「（紗枝を見て）え、まじ…」

祐樹「夏葉さんからの告白断った時もさ、『名倉はLGBTQだから
男以外ナシなんだ』とか雑な噂広めてたよね。それって
やっぱ振られたの悔しかった感じ？」

紗枝、気まずくて顔をそらす。

祐樹「男でも女でも、人間としてなしたよ、お前」

紗枝「…！」

渚の腕を引いて教室を出る祐樹。取り残された
奈々と紗枝、所在なさげに佇む。

奈々「…好きだったん？」

紗枝、目に涙を浮かべ、頷く。

紗枝「なんか間違えたな…間違えてたっぽいよね、私。何間違

えたか、あんまわかんないけど」

少し離れた所から、その様子を眺めている美香。

350 同・廊下

渚の手を引いて歩いている祐樹。

渚「ねえ、離して。もう殴らないから」

祐樹「あつ…ごめん（と、手を離して）」

渚「なんか、気づいたら名倉が言葉で全員ぶん殴ってたけど」

祐樹「毒舌オネエ？」

渚「最悪。あれ」

祐樹「え、でもさ。ちよつと吹き出しそうになってなかった？」

渚が強く首を横に振るのを見て、穏やかに笑う祐樹。

祐樹「あいつら…物理的にも殴りたくなってきた。戻って殴る？」

渚、祐樹を見つめる。

渚「意外かも。名倉がそんな怒るの」

祐樹「まあ、春岡好きですから？」

渚「…一緒だ」

祐樹「でも僕、春岡から出禁食らったからな」

渚「お、私も。一緒だ」

祐樹と渚、握手する。

渚「懲りずに、行くよね？」

祐樹「うん。ばあちゃん連れていく。気合いそうだから」

渚「了解。…てか、やば。ベース忘れた。また後でね」

踵を返し、小走りで戻る渚。

渚の背中を見送る祐樹、ふと思い出して、

祐樹「や、へ、照明…」

360 同・階段へ踊り場

踊り場に差し掛かり、階段を降りようとする渚。その背中を押そうとする腕が伸びる。伸びた腕を、別の手が掴む。渚、気づかずに階段を駆け下りる。祐樹、美香の腕を掴んでいる。

祐樹「え…なんで？」

美香、目を逸らす。

370 同・校舎裏

祐樹と美香、歩いてくる。

祐樹「…うん。ここなら、誰も来なそう」

美香「…ごめんなさい」

祐樹「春岡の自転車を押したのも、長野さん？」

美香「…え…」

祐樹「それがばれたくないから、色々調べてる菅沼のこと…」

美香「…違います。なんでそうなるんですか」

祐樹「知ってたから。春岡が自転車に乗ってたこと」

美香「だって噂で…」

祐樹「学校には『記憶がない』ってこと自体、伏せられてる。誰

もお見舞い行っていないから、噂で聞くこともない」

美香、気まずそうに俯いて、

美香「…その場には、いました」

祐樹「やっぱり」

美香「…でも、何もしてません」

祐樹「今、友達突き飛ばされそうになったけど」

美香「つい、さっきなんです。こんな馬鹿になったの」

祐樹「…さっきの喧嘩？」

美香、頷く。

祐樹 「なんで？ 長野さんは関係ないじゃん…」

美香、深くため息をつく。

美香 「私、名倉君のこと好きだったんです」

祐樹 「…え？」

美香 「去年まで同じクラスだったの、覚えてますか？」

祐樹 「うん、まあ…」

美香 「覚えてないな、これ」

祐樹 「…ごめん…」

美香 「この前、やっと話せたと思ったら、隣に菅沼さんがいて」

祐樹 「菅沼は、別に…」

美香 「さすがに分かりますよ。あの時の、菅沼さんの反応で」

祐樹 「じゃあ…」

美香 「でも、さっきの喧嘩聞いて」

× × ×

フラッシュ。シーン34。

祐樹、紗枝に向かって、

祐樹 「人間としてなしたよ、お前」

× × ×

美香 「あれ、私に言われてるみたいなのがして（と寂しげに笑っ

て）」

祐樹 「そんなことは…」

美香 「でも、高野さんと同じように、先入観で二人を見てたから。

一緒です」

祐樹 「…」

美香 「本当は菅沼さんみたく、名倉君に人間として好きになって

ほしくて…。菅沼さんじゃなく、私が名倉君のそばにい

れたらって。…こんなこととしても、仕方ないのに」

祐樹 「…うん」

美香「本当に、ごめんなさい」

祐樹「でも…良かった。あの時止められなかったら、本当に一生、

話せなかったと思うから」

美香「話す気なんて、なかったでしょ（と笑って）」

祐樹「自分の気持ちを正直に言える人は、わりと好きだよ。…人

として」

美香「…変だな、振られてるのに。ちょっと嬉しい」

美香、少し考えて

美香「あの…私、見ました。春岡君が、自分からハンドル切って

倒れたの」

祐樹、目を見開く。

380 生田病院・待合室（夕方）

席に座ってノートに何かを書き込んでいる光子。

書きづらそうにしていた光子、鉛筆、ノートを落

としてしまう。そこに圭人が通りがかる。

圭人「あ…」

かがんで、ノートを拾おうとする圭人。ノートに

は「好きな食べ物…あんこ」「好きな映画…バック

トゥザフューチャー」等、光子のプロフィールが

鉛筆で書かれている。拾って光子に手渡す圭人。

光子「丁寧に頭を下げ）ありがとうございます…」

圭人「あの、この前…」

光子、不思議そうに圭人を見ている。

圭人「（察して）お孫さんの友達…知り合いの、春岡です」

光子「あら、そうなの！ 仲良くしてあげてね」

圭人「ああ。まあ…。あの、このノートって…」

光子「これ？ ああ、私ボケちゃってね…。忘れちゃう前に、

色々書き留めてて。あ、そうだ」

光子にノートを手渡され、戸惑う圭人。

光子「間違いないか、見てくれる？ …孫のあたり」

圭人「はあ…」

ノートを捲る圭人。所々、書き損じとみられる箇所

所に横線が引かれ、訂正されている。

圭人「鉛筆使ってるのに…消しゴム、使わないんですか？」

光子「なんか、もつたいなくて」

圭人「もつたいない？」

光子「書き間違いは書き間違いで、私が最初に思ったことだから。

消しゴムのカスに変えちやうのがなんか、もつたいなく

てね」

圭人「…なるほど」

ページをめくると「辛かったこと」というページ

に。「出産休暇を取った後、全く違う部署に飛ばさ

れた」「上司に成果を取られた」などが書いている。

圭人「辛いことも、書いてるんですね」

光子「ん、どれ？」

光子にノートを見せる圭人。

圭人「辛いことなんて、忘れちゃった方が良い気がしちゃいます」

光子「うん…なかったことにできたら、いいよね。でも、これが

ないと、今とは違う人生になってたから」

圭人「それは…そうかもしれないですけど」

光子「でも私には、今この人生しかないから」

圭人、光子から目を離せなくなる。

光子「じゃあ、この人生をつくったものは全部、覚えておきたい

でしょ。ボケちゃったのは辛いことだけど、あなたと出

会えたでしょ？」

圭人の目から、涙が溢れる。圭人の頭を撫でる光子。そこへ、祐樹が現れる。

祐樹「お待たせ……。ん…春岡？」

圭人、祐樹に気づいて急いで涙を拭く。

祐樹「人のばあちゃんに甘えて…」

圭人「…ごめん…」

祐樹「まあ…許すよ。その代わりに、出禁解除して」

圭人「…分かったけど…」

390 同・病室前(夕方)

病室の前で待っていた渚のもとに、圭人・祐樹・光子がやってくる。

圭人「渚…」

祐樹「(圭人へ) 渚も、解除でいいよね？」

圭人「…面倒くさいからいいよ。もう」

祐樹「(光子へ) 10分だけ、前で待っていてくれる？」

光子「あら、修羅場かい？」

祐樹「まあ…そんな感じ(と笑って)」

祐樹、病室前の椅子に光子が座るのを手伝う。

400 同・病室(夕方)

ベッドに横たわる圭人。ベッド脇に座る祐樹と渚。

圭人「…で、何」

祐樹「事故のあたりで起きたこと、全部話したくて」

渚「え…いいの…？」

祐樹「(頷いて) 春岡に起こったこと、確かめたい。ちゃんと仲直りしたいから。…なかったことにせず」

圭人と渚、祐樹を見つめている。

祐樹「…春岡さえ、良ければだけど」

主人「（ため息をついて）クラスで浮いてたこと？」

祐樹、驚いて主人を見る。

主人「母親に、ミュージシャンになんかなるなって言われたこと？
あと、渚にバンド辞めたい、って言われたこと」

主人、祐樹を見て

主人「あとは…名倉が俺に告白したこと、とか」

祐樹、言葉を失っている。

渚「記憶、失くした振り…だったんだ。やっぱり」

祐樹「やっぱり？ どういうこと？」

渚、主人の枕元にある「記憶障害と闘った3年」という本を手取る。付箋のある場所をばらばらとめくっていく渚。

渚「この本さ、前半しか読んでないでしょ」

主人「…うん…」

渚「後半の記憶の取り戻し方じゃなくて、記憶を失くした時の感覚とか、症状にばかり線引いて、付箋貼って」

祐樹「……」

渚「勉強してたんですよ。記憶がない人の生き方」

主人「変なところ鋭いよな…渚って」

祐樹「…嘘…」

410 同・病室の前（夕方）

病室の前、由美が戻ってくる。病室からただならぬ雰囲気を感じた由美が入ろうとするが、光子に袖を掴まれる。

光子「（声を潜めて）今、修羅場中」

由美「え…？」

420 同・病室の中(夕方)

圭人、祐樹と渚の二人に目配せしながら

圭人「俺さ、ミュージシャンになりたいのね」

祐樹「うん…知ってる」

圭人「クラスの奴らに馬鹿にされるのは別に…どうでもよかった。

原田とか、結構うざかったけどね」

渚「分かる」

圭人「でも、母親から『ミュージシャンになるな』って言われた

のと、渚にバンド辞めるって言われたのがほぼ同時で」

渚「……」

圭人「大事な人全員から、『お前はミュージシャンになんかなれ

ねえよ』って言われてる気分になって」

渚「それは…そんなつもりで…」

圭人「で、名倉に告白された」

祐樹「それは…別の問題でしょ」

圭人「全然、別じゃない」

祐樹「…え…」

圭人「俺は、バンドメンバーとは付き合わないって決めてんの。

男でも、女でも」

圭人、渚を見ながら

圭人「渚にバンド辞めるって言われて、名倉はどうなんだろうって

思ってたら…告白されて」

祐樹「……」

圭人「名倉も、そっちかって。俺とはバンドとしてじゃなく、恋

人として一緒にいたいのか、って」

祐樹『そっちか』って、そっちの意味か…」

圭人、悲し気に笑って

圭人「俺とバンドやりたい奴、誰もいないじゃんって」

祐樹と渚、俯いている。

圭人「自転車漕いでる時に、『いつそ別人になったら、誰も文句言わないし、すつきりするかな』って。思いつきりハンドル切ってみた。結構、演技もうまくいった」

渚、手元の本を眺める。

圭人「なのに…なんでいなくななんなんだよ。見舞い来んなよ。

二人とも、気まずいくせにさ」

祐樹「別人になんか、なれるわけないだろ」

渚「名倉…」

祐樹「別人になったつもりでも、変えられないことばかりだよ。

ギター下手だし、歌詞ださいし。あと、鼻筋がきれい」

圭人「……」

祐樹「かっこつけて口悪くて、でも言葉はなんか、優しくて…。

お母さんを救う音楽作るために、ミュージシャンになるうとして。その割に、自分が音楽に救われちゃって」

430 同・病室の前(夕方)

由美、ハンカチで涙を拭っている。光子、由美の頭を撫でる。

440 同・病室の中(夕方)

圭人、祐樹を見つめる。

祐樹「無理だろ。どう頑張っても…春岡圭人だって。お前」

渚、涙目で二人を見つめる。

祐樹「僕と菅沼が好きな、春岡」

圭人「でも、告白…なかったことにしようとしてただろ」

祐樹「したよ。楽になれるかと思って。全然楽になんなかった。

僕は…忘れられないから」

圭人「……」

祐樹「勝算なんかどうでも良くなるぐらい、もっと圭人と一緒にいたいって、そういう意味でも好きなんだって分かってほしくて。死ぬほど考えてたから」

圭人「でも、それで結局一緒にいれなくなったら意味ない。バンドもなくなってる…」

渚「バンドバンドうるさいな！ もう…」

祐樹と圭人、驚いて渚を見る。

渚「何？ 私らって、バンドリアリテイションやってんの？ バンド終わったら全部終わんの？ …ふざけんなよ。こっちは人生やってんだよ」

圭人「こつちだって、バンドに人生かけて…」

渚「私、バンド1位じゃないもん。知らないよ」

圭人「はあ？」

祐樹「僕も…バンド1位じゃない」

圭人「何だよ、お前ら…。なんでランキングなんだよ…」

渚「1位が一緒じゃないと、一緒にいられないんだっけ？」

祐樹、渚を見つめている。

渚「友達つてもっと簡単で、強いもんだから」

圭人、息を吐いて

圭人「俺だって、友達やめるとは…言っていないし…」

渚、静かに頷く。

圭人「でも、バンドも続けて…」

渚「全然分かってない。話聞いてた？」

祐樹、笑ってしまう。

圭人「いやだから、今回の件を乗り越えて、もっと良いバンドになると思うんだよ。俺ら」

渚「言っておくけど原田とか、超うまかったよ？ 圭人の10倍ぐらい」

圭人「いや…技術だけじゃないから…音楽って」

渚「出たよ、この逃げ方…」

祐樹、圭人と渚を手で制する。

祐樹「ごめん。告白させて」

渚「え…懲りないね」

圭人「ごめん。俺、恋愛とか今は…」

祐樹「そうじゃなくて（と笑って）」

祐樹、圭人と渚を抱き寄せる。

祐樹「一緒にいたら…なんでもいい。好きです」

渚、唇を噛みしめながら、祐樹を抱き返す。

圭人「…俺も」

圭人に抱き返された祐樹、目に涙がたまる。

圭人「ってことはさ…バンド、続けるってこと？」

渚、祐樹を押し離し、圭人を睨みつける。

渚「都合よく取りすぎ。今のは、『バンドじゃなくいい』って

意味だから」

圭人「いや、『バンドでもいい』って意味だろ」

渚「そもそも、簡単じゃないからね、バンドで食べていくのって」

圭人「今書いてる曲聞いたら、意見変わると思う。『ロストメモ

リー』っていう歌で…」

渚「曲書いてたの？ こつちがあんたのために、必死で走り回っ

てた時に？ 記憶ない振りして学校さぼって『ロストメ

モリー』！ 姑息だねー」

圭人「姑息？ 人の記憶喪失に乗っかって、借金消滅させようと

してた奴が言う？ 早く返せよ金」

口論を続ける圭人と渚を微笑ましく見つめる祐樹。

祐樹 N 「好きって…」

○同・病室の前（夕方）

由美と光子、外から三人の様子を見守っている。

光子 「死ぬほどややこしくて…面白いんだよねー」

〈終〉